

# 近代の日中留学交流

李曉東（島根県立大学）

はじめに——「文化運搬者」としての留学生

日本と中国とは数千年の交流の歴史をもっているが、近代以降の両国間の交流は未曾有の規模と深さで展開していた。留学はその最たる象徴だったと言ってよい。近代中国の日本留学という交流がどのように行われ、日中関係にどのような影響を与えたのか、また、現在の私たちに何を残したのかは、本報告の課題である。

考察に先立って、まず、本章は留学をどのような視点から捉えるのか、について触れておきたい。

周知のように、アメリカの国際政治学者ジョセフ・ナイ氏が著名な「ソフト・パワー」論を唱えている。ナイによれば、ソフト・パワーとは、ハード・パワーのように、軍事力による強制、あるいは、経済的な力を背景にした報酬などの手段によって望む結果を得るのではなく、その国の魅力によって望む結果を得る能力である。つまり、自国の軍事力あるいは経済力をもって相手に従わせるのではなく、自国の魅力で相手を引きつけるということである<sup>1</sup>。

そして、ナイによれば、ソフト・パワーは、他国がその国の文化に魅力を感じる時にできるものである。つまり、文化は魅力をもたらし、そして、魅力はソフト・パワーをもたらすということである。文化を「社会にとっての意味を確立する価値観と活動」<sup>2</sup>と定義したナイは、とくにハイ・カルチャー（high culture）を重視し、エリート層を対象にしている文化交流がソフト・パワーの形成にとって重要だと強調する。

しかし、ソフト・パワーはソフトであっても、パワーであることに変わりはない。つまり、文化という魅力を強化することによって自らの立場を強くし、国際政治のなかで優位に立つという発想自体は、文化を国際政治における一つの力や手段として扱う、ということの意味しているにほかならない。「文化」に対するこのような理解はやはり非常に戦略的な思考が込められており、その意味で、文化は手段化されていると言わざるを得ない。

国際関係を「文化」の視角から捉えるという意味では、平野健一郎氏も同じである。しかし、平野にとって、文化は国際関係を考える方法であっても、手段ではない。平野は文化を「生きるための工夫」（designs for living）<sup>3</sup>と定義している。そのような視点からすれば、国際関係そのものは一つの文化である。そもそも、国民国家（Nation-state）というのは人工的に作り上げられたものであり、その意味では、文化の産物である。また、国際関係、いわば国と国との関係が出来るということは、結局のところ、人間の営為である。したがって、国家と、国家間との関係はいずれも人間の文化そのものである。

しかし、興味深いことに、例えば「国際社会」という言葉は英語では inter-national society

であるが、平野は、現実にある国際社会は、往々にして、**inter-state society** として理解されがちだと指摘する。つまり、国際関係とは、本来、**nation** 間の関係であり、すなわち人間の文化的営為であるにもかかわらず、そこにおける担い手であるはずの **nation** が見落とされがちだということである。

そのような視点から、平野は、「動く文化要素」が国際関係をつくり出すと主張する。国際関係は、抽象的な **state** と **state** の間の関係ではなくて、さまざまな行為の主体、とくに人間の間関係である。そして、このような「動く文化要素」のなかで、「文化運搬者」(**culture carriers**)<sup>4</sup>は重要な行為主体である。

以上のように、ナイが強調した **high culture** と、彼がとくに意識しているエリート層にしても、あるいは、平野が提起した「文化運搬者」にしても、文化に対するとらえ方にずれがあるが、文化のキャリアであるヒトが国際関係のなかで非常に大きな意味をもっていることは変わらない。我々が考察しようとする「アジア共同体」も一つの追求すべきコミュニティである以上、それは人間の文化的営為の所産であることは言うまでもない。その場合、文化の **career** が非常に重要な意味をもつ。この章で説明する留学生は、まさにこのような「文化運搬者」として、近代の日中関係に決定的ともいえる影響を与えた人たちであった。

「文化運搬者」の視点からすれば、近代東アジアにおける留学をはじめとした人的交流は一つの壮大な物語であった。近代中国と日本の欧米留学と、中国や朝鮮、ベトナムなどのアジア諸国の日本留学、また、例えば、中国において大量に見られるように、日本や、欧米諸国からのお雇い外国人教師、顧問、宣教師など、様々な「文化運搬者」の往来が東アジア諸国間関係を多次元にわたって織りなしていた。そのなかで、近代日本に留学した中国留学生は、その規模の大きさのみならず、近代中国に対する影響の深遠さからしても、もっとも壮大なストーリーのひとつだったと言わなければならない。

## 1. 近代中国の日本留学

### (1) きっかけ

#### a. 留学の機運の醸成

近代中国の日本留学は一八九六年に始まり、一八九八年に正式な国家政策となって、日中戦争の勃発まで続いた。とくに、一九〇五、六年前後、日本に留学した中国留学生が八千人あまりまで達したと言われている。では、日本留学はどのようにしてこのような大きな潮流となったのだろうか。

まず、日本留学の背景としては、やはり中国の日清戦争における敗戦が大きかった。それまでの日本にとって、中国はとてつもない大きな国であった。それには二つの意味が含まれている。一つは、日本は歴史上、ずっと中国文化から大きな影響を受けてきたという意味であり、今一つは、近代国家として新たに出発した明治日本にとって、中国という存

在そのものが大きな脅威であった、という意味である。明治国家が成立したあとに一貫して朝鮮半島を日本の国益に関わる重要な地域として位置付けた日本は、やがて朝鮮半島に進出しようと試みた。しかし、これらの試みはいずれも清国によって阻まれた。そのようななかで、日本国内で清国脅威論が喧伝されるようになった。そして、日清戦争における日本の勝利は日本をこのような大きな緊張から解放したのである。日清戦争をきっかけに、日中の立場は大きく逆転したことになった。

日清戦争後、中国国内で改革の気運が高まった。明治維新による日本の変身ぶりが当時の中国のエリートたちを大きく刺激した。一部の知識人や官僚は、中国の危機を救うためには改革を行わなければならない、そして、そのために人材の養成が急務だと盛んに唱えた。そのなかで、最も代表的なものの一つは張之洞による『勸学篇』（一八九五）だった。この書物は後に「日本留学の宣言書」と呼ばれているように、日本留学を提言した。

張之洞はまず日本の経験を紹介する。「日本は小国である。なぜ勃興したのか。伊藤、山縣、榎本、陸奥などはみな二〇年前に西洋に留学した学生だった。（彼らは）自国が西洋に脅かされるのに憤り、（中略）独・仏・英諸国に赴き、あるいは政治工商を学び、あるいは水陸兵法を学んで、留学から帰国した後に将相に任用され、（日本の）政事がそれによって一変し、東方を雄視することになった」<sup>5</sup>。張之洞からすれば、国を強くするために、留学して、西洋から新しい知識を取り入れることが最も有効な方法なのである。

留学の効用について、張之洞は、「西洋に一年間出かけることは、西洋の本を五年間読むことに勝る。（中略）外国の学校で一年間学習することは、中国の学校で三年間学習することに勝る」<sup>6</sup>と主張している。「百聞は一見にしかず」だからだ。

では、西洋に関する知識を受容するには、なぜ直接に西洋に留学するのではなく、日本に留学するのか。

張之洞は両国の近似性と効率性という二つの面からその理由を挙げた。すなわち、前者の場合、両国は地理的距離が近いと、多く派遣できるし、考察しやすい。そして、言語が近いと、習得しやすい。また、両国の状況や習俗も近いと、倣いやすい。一方、後者の場合、西洋の書物は繁多だが、その中の重要でないものを日本人はすでに削ったり適宜に改めたりしたため、効率的に倣うことができる、という理由である<sup>7</sup>。張之洞はここで日中間の言語、習俗などの面での近似性を強調し、「同文同種」的な考え方を示したとともに、短絡的であるが、日本に学ぶ効率性を主張したのである。

以上の日清戦争後に高まった改革の気運は、やがて戊戌維新につながった。康有為、梁啓超ら知識人たちが光緒帝の支持を背景に、一八九八年（戊戌）に改革を推進した。改革は日本の明治維新をモデルにしたものだった。改革のリーダー康有為は張之洞と同じような論法を用いていた。すなわち、康有為によれば、欧米が三百年間かかって現在の政治体制を造成したが、日本は欧米に倣い、三十年間かかって実現した。中国は広い土地と数多くの民を以て、近く日本に倣えば、三年間でグランドデザインができ、五年間で条理ができ、八年間で成果を挙げ、十年間で覇を唱えることができる<sup>8</sup>。彼はこのように豪語して、

日本に倣う意義を強調した。そして、改革の一環として、日本留学は国家政策のひとつとして打ち出されたこととなった。

しかし、戊戌の改革は、西太后によるクーデターでわずか三カ月で失敗に終わった。掲げられていた改革の取り組みもそれに伴いほとんど頓挫したが、日本に留学生を派遣するという政策は残された。日本留学を強く薦めた張之洞は戊戌政変のなかで西太后側につき、その後、康有為らによって厳しく糾弾されたが、両者は日本留学政策に関して共通した認識をもっていた。

#### b. 日本側の積極的な働きかけ

一方、日本側も中国側に積極的に働きかけた。一八九七年ごろから、日本の朝野は相次いで中国の有力者に対して遊説活動を展開した。とくに参謀本部は積極的だった。時の次長川上操六は宇都宮太郎と福島安正を派遣して、中国の南方の有力者張之洞、劉坤一らを歴訪し、日本に軍事留学生を派遣するよう遊説活動を行った。また、教育者加納治五郎や下田歌子らも中国を訪問し、日本に留学生を派遣するよう中国側に働きかけた。

なぜ日本が積極的に動き出したのか。我々はこのときの中国駐在公使である矢野文雄(竜溪)が一八九八年に日本の外務大臣に書いた手紙からその一端を垣間見ることができる。そのなかで、

「我国の感化を受けたる新材を老帝国内に散布するは、後我勢力を東亜大陸に樹植するの長計なるべしとの次第を茲に敷衍せば、其武事に従ふ者は日本の兵制を模倣するのみならず、軍用機械等をも我に仰ぐに至るべく、士官其他人物を聘用するも日本に求むるべく、清国軍事の多分は日本化せらるること疑を容れず」<sup>9</sup>

と語られている。日本留学を通して「親日派」を養成し、清国を軍事的に日本の影響下に置こうとするねらいであった。

このような思惑は日清戦争後の日本国内の一部の人々がもつ危機感によっても裏打ちされている。彼らにとって、戦争の勝利は日本に新たな危機感をもたせることとなった。なぜなら、清国は負けたが、あいかわらず一つの大国であり、その復讐の可能性に備えなければならないからである。例えば、一八九五年に徳富蘇峰の民友社が出版したある書物に、「日本将来百年の長策は他なし常に制清策を取る」ことだと唱え、「当代の日本国民は遂に癒ゆべからざるの鉄創を隣邦に加ふるの止む無き場合に立ち到りぬ、戦勝固より祝すべし、而して一たび暴清の全力を挫きし吾人は飽迄永遠に彼を屈服せざるべからず」<sup>10</sup>と述べている。また、同じ年に、若き尾崎行雄も日清戦争後の形勢を分析して、東洋の秩序をかく乱する要素として「支那の再起復讐」<sup>11</sup>を挙げている。彼はヨーロッパの列強より先手を打って、中国を「併領」することを主張し、それを中国の再起を防ぐ策とした。

民友社は制清策を日本における武備教育に求め、尾崎は清国併合を主張した。これらの

主張は、中国側に日本留学を薦めた参謀本部などの、「親日派」の養成という思惑と方法的に異なっていたが、清国の再起に備えるという点においておなじであった。

勿論、上記の政治的打算とは別の考えもあったことを見落としてはならない。実際、中国と同じ開国をさせられた経験を持つ日本の国内において、強大な西洋のプレッシャーに対抗するために日中は提携すべきだという論調が一貫して存在していた。たしかに、例えば福沢諭吉のように、一向に改革しようとしないう中国や朝鮮と連携する見込みがもはやないと判断して、脱亜論（一八八五年）を唱えた者もいたが、同じ時期に、西洋に対抗するための「日清提携論」も根強く存在していた。日清戦争後、日清の提携は日本が主導すべきだと、少しずつ性格を変えながらも唱えられていた。「同文同種」や「唇齒輔車」などの言葉もこの時期の日中関係をのなかで語られることが多かった。このように、西洋の強圧という日中共通の境遇や、日中両国の歴史的なつながりなどから生まれた一体感は、日本が中国からの留学生を受け入れる際に、とくに民間レベルでの積極的な姿勢を支えるもう一つの要因だったと言ってよい。

このように、中国の内部から変革を求めた官僚や知識人たちが上げた声と、日本朝野の積極的な働きかけの相乗効果で、日本留学がやがて一つの潮流となった。『勸学篇』を著した張之洞自身はいち早く湖北省から留学生——それも軍関係の留学生であった——を送り出した。日本の参謀本部の遊説による働きかけはこのように、見事に実を結んだのである。

## （2）日本留学の諸段階

一八九六年に、最初の十三名の留学生が日本に派遣された。ただし、それは定められた政策に基づいた派遣ではなく、日本駐在公使館の業務上の必要からの派遣であった。十三名の学生の教育は東京高等師範学校の校長であった加納治五郎に委ねられた。加納は後に中国の留学生を教育するために「宏文学院」という学校を立ち上げて、多くの中国人留学生を送り出したが、最初の十三名の学生の学習生活はあまり順調ではなかった。

「同文同種」のイメージはここで大きな壁にぶつかったのである。十三名のうちの四名は、二、三週間もしないうちに日本での生活に耐えられずに帰国していった。飲食習慣の違いに加えて、なによりも精神的な苦痛に耐えかねたのである。日清戦争後の中国蔑視の雰囲気の中で、学生たちが外出の時に日本の子供たちに付きまとわされて、服装や辮髪の様子がからかいの対象になったのが原因だった。後に、また二人の退学者が出た。最初の留学生の半数近くは、結局、挫折して留学をやめたのである。

しかし、日本留学が清国の国家政策になった後、各省（日本の県に相当）が相次いで留学生を派遣した。それに私費留学が加わり、日本留学が一つの流れとして形成された。一九〇三年に、留学生数はすでに千人を超える規模になった。そして、状況が大きく変わったのは一九〇五年という年であった。この年と翌年に日本に留学に来た中国人留学生は八〇〇〇人を超えて、ピークに達していた。

これには、二つの大きな原因があった。一つは、一九〇五年に、千年以上の歴史をもつ

科挙試験制度が廃止されたのである。周知のように、科挙は官吏登用の資格試験であり、すべての成人男子に開かれた立身出世の登竜門であった。中国の官僚制度の一環として機能してきた科挙はしかし、やがて内容よりも形式、中身より文章の華麗さを競うものになり、もはや実学を求める新しい時代に適応できなくなった。結局、「西欧の衝撃」のなかで、国を強くするためには、儒教經典である四書五経よりも時代が求める新しい知識が必要だというのは、この時期の常識となっていた。

しかし、科挙の廃止は同時に、人々の出世の道が断たれたことを意味するものだった。科挙が廃止されたあと、それに取って代わる道として「新学」を身につけなければならないと人々が考えた。しかし、中国に新学を教える学校がまだほとんどなかったなかで、留学はほぼ唯一の方法だったと言ってよい。その結果、この年に多くの人々が新たな功名を求めて、大挙日本にやってきた。日本を留学先として選んだ理由は、すでに張之洞の『勸学篇』によって述べられていた通りであった。

さらに、日本がこれほど注目されたのはもう一つの理由があった。一九〇五年は、日本が日露戦争に勝利した年でもあった。中国も戦勝した日本をモデルにして立憲政治を実施しなければならない、という思いは人々が日本に留学する理由をより強固なものにした。

以上の二つの理由により、中国からの留学生が大挙日本にやってきた。八〇〇〇人という留学生の規模は、日中関係史上未曾有のことであった。一九三七年に日中戦争が勃発するまで、累計で少なくとも五万人以上の留学生が日本に来ていたと言われている。なお、日中戦争中でも、満州国と汪兆銘政権から留学生が派遣され続けていた。

日本に留学した学生は、大きく言えば、法政と、師範、軍事を専攻する留学生が最も多かった。それは同時代の清末中国で行われた諸改革と対応していた。日本で新しい知識を身につけた留学生たちは帰国後、各分野で核心的な役割を果たした。また、留学生のなかには、すでに「進士」などの功名を手にしてしていた者も少なくなかった。一九〇六年に、清朝政府は進士館の進士を法政大学の法政速成科に入学させた<sup>12</sup>。「進士」とは、科挙試験の最終試験に合格した人たちに与えられた称号である。しかも、「進士」の中のトップ成績を収めた「状元」も含まれていた。彼らは本来、中国における知識階級上位にいた人たちで、エリートであった。にもかかわらず、これらの知識人たちは日本に送られ、日本の速成科ではじめから再教育を受けることになった。その象徴的な意味は非常に大きいものだった。本来、例えば、日本留学を熱心に推進した張之洞は、同時に代表的な「中体西用」論者であった。「中体西用」とは、機械や技術などの枝葉的な部分である「用」は西洋に倣う必要があっても、核心的な道德価値である「体」は堅く伝統の優位性を保持しなければならないという、「東洋道德・西洋芸術」（佐久間象山）と相似した発想であった。日本に倣うことは、自分たちの道德的価値的優位性の保持とは矛盾なく張之洞のなかで共存していた。しかし、以上の進士留学生のなかに、このような「中華思想」と呼ばれる自己中心的な発想はもはや存在しなかったのであった。

## 2. 留学という交流

### (1) 師弟双方の心情

日本にやってきた中国の留学生たちは日本人の先生に学ぶことになったが、師弟双方はどのような心情でこの国をまたがる教育に臨んだのか。

まず、留学生たちの心情は、あえて言えば、幕末期の「尊王攘夷」派に似ていると言える。いわゆる「尊王攘夷派」の人たちは積極的開国派だった。下関戦争、薩英戦争に負けた長州、薩摩の武士たちは、自分たちと列強との間の力の差を見せつけられた。勝てない相手に対して「攘夷」を叫んでも何の意味も持たないと悟った武士たちは、相手に倣って自分たちを強くする道を選んだ。薩英戦争後の交渉が薩摩とイギリスとの接近のきっかけとなったことによって象徴されているように、「尊王攘夷」派は「攘夷」から積極的に開国することに転換したのである。このような姿勢は、幕府がペリーのプレッシャーに屈服した形でやむなく開国させられた、という消極的な開国とは対照的だった。日清戦争後に日本にやってきた中国人留学生たちは、日本で近代国家意識に目覚めて、自国を強くする情熱に燃え上がったとき、彼らの心情は「尊王攘夷」派と似ていた。自分たちを強くするために負けた相手に学ぶという心情は日本の幕末志士につながっていると言ってよい。前述のような、日本での生活に耐えきれずに帰国した者がいたし、もっぱら新しい形の功名を求めるために日本にやってきた者も数多くいたし、また、文字通りの「遊学」生も多数いた。しかし、例えば、以下のようなくぐりたりは同時代の留学生が創刊した雑誌に満ち溢れており、やはり近代的国民意識を身につけた多くの留学生たちの心情を代弁していたと言える。

「嗚呼、我が国民は自ら考えるがよい。甲午以来、彼の国は勝ったのにもかかわらず、我国を恐れている。我国は敗れたのにもかかわらず、奮起しない。一、二の仁人が奔走し呼びかけたとは言え、和議が成るや否や、平気で歌に耽る。(中略) 嗚呼、それでもなお人心があるというのか。たとい滅ばないようにしようと思っても、はたしてできるのか」<sup>13</sup>。

一方、日本の教育者の心情も多種多様であった。例えば、遣隋使や遣唐使を持ち出すまでもなく、歴史的に日本はずっと中国の影響を受けてきたが、いまや、中国の人々が日本に学びに来た。留学生を教育することは、これまでの中国に対する「文化的負債」を返すことになるのだ、という議論がある一方、今後の日本の「大陸経営」という視点から、「親日派」の学生を育てる必要がある、という戦略的な考えもあった。そして、もう一つこの時期にヨーロッパに広がった黄色人種脅威論を唱える「黄禍論」に対して、黄色人種である東洋の国々は団結しなければいけないという議論もあった。しかも、これらの議論はまったく別々に存在したものではなく、多くの場合、同じ人のなかに共存していた。

具体的に、例えば、早稲田大学の清国留学生部の主事だった青柳篤恒を例にとってみよう。青柳は、一方では、留学生教育は「国際間の親誼に関し、東亜保全の大局に関し、支那に於ける列国勢力の消長に関し、将来早晚必ず来るべき支那問題に就ての列国会議に於ける発言権の大小に関す」るものだ<sup>14</sup>と述べている。彼は、中国に関する問題は日本の同意を得なければ行えない、というアジアモンロー主義的な発想に同調し、その確立のために、留学生教育は非常に重要な政治的な意味をもつのだという議論を展開した。しかし、他方では、彼は教育者として、同時に次のように述懐している。

余は一人の清国学生の殖ゆる毎に、殊に半白にして活気なき老書生、歩行み慣れざる足引き摺りつつ書物片手に霖雨泥濘の中を通学する女学生等を見る毎に、彼等の不幸を思ふて慨然清国々家の為に浩嘆し、清国学生の為に満斛の涙を灑ぐを禁ずる能はざるなり<sup>15</sup>。

青柳は教育者という立場から、清国民を軽べつするという当時の日本社会一般の態度を退けて、留学生に接するには「清浄無垢の親切心」をもって教育しなければいけないと強調した。

このように、日中の師弟双方は、それぞれさまざまな思惑や心情を交錯させながら、教育と学習に臨んでいた。留学生教育はまさに以上のような雰囲気の中で行われたのである。

## (2) 師弟間の交流

清末中国の日本留学はいろいろな問題が生じていた。何より、日清戦争を「文明」対「野蛮」の戦争として位置づけて、その戦争に勝利した後の日本社会が留学生たちにとって、けっして気軽に留学生活を送る環境ではなかったのである。しかし、それでも、日中の師弟の間にやはり心の温まる交流があった。

まず、よく知られている藤野巖九郎と魯迅との交流である。魯迅は文学を志すようになる前に仙台の医学専門学校で勉強をしていた。周りの日本人学生は中国からきた魯迅をべっ視していたなかで、藤野先生だけが彼に非常に親切に接してくれた。それは魯迅にとって、いつまでも忘れられない経験であった。藤野先生との交流は魯迅の小説「藤野先生」に描かれ、今日まで語り継がれている。

もう一つ触れておきたいのは、大正デモクラシーの代表的な思想家吉野作造と留学生の交流である。交流の詳細は明らかではなかったが、中国留学生との交流は吉野の中国認識に決定的な影響を与えたと言ってよい。吉野は一九〇六～一九〇九年の間、当時中国の最大の実力者であった袁世凱の息子の家庭教師を担当した。この三年間の中国での滞在経験に対して、吉野はあまり良い印象がもてなかった。給料面をめぐる不満もさながら、中国の政治を左右する力を持ち、後に中華民国の初代大總統になった袁世凱を間近で観察する



ことができた吉野は、袁世凱と中国に対してあまり希望をもてなかったようだった。そのような背景もあって、一九一五に、日本政府が袁世凱政権に対して二十一カ条を突きつけたとき、吉野作造は、二十一カ条の要求は「大体に於て最小限度の要求であり、日本の生存のためには必要欠くべからざる」ものであり、「第五項の削除は、甚だ之を遺憾」<sup>16</sup>だという見解を示した。しかし、第五項をはじめとした二十一カ条の要求は中国を保護国化する同然の要求であったことは周知のとおりである。吉野がこのように主張したのは、日本は中国における列強の競争を傍観することができないこと、そして、「支那の将来は果たして吾々の期待するが如く、自主独立の国家として健全なる発達を為し得るや否や、明白でない」<sup>17</sup>、などの認識をもっていたからである。このときの彼は中国に明るい展望を持てなかったのである。

しかし、吉野の中国観はその後大きく変化した。彼は自著『第三革命後の支那』（一九二一年）のなかで、「支那の将来の永遠の中心的勢力となるものは……現に祖国の改革を唱えて居るところの幾百の青年である」<sup>18</sup>と述べて、「若き支那」、「青年支那党」に期待を寄せるようになった。実際、この時期に、吉野は中国革命史の研究を始め、寺尾亨の紹介で日本にいる中国人留学生と接触した。吉野は自分以上に確実にして広汎な材料を得ている者が日本にあまり多くないと自負していた。このことから容易に想像できるように、吉野は中国の若い革命派留学生たちと深い交流があった。そして、それをきっかけに、吉野は袁世凱の中国ではなく、若い留学生たちを代表とする「ヤング・チャイナ」の中国に新しい希望を感じたに違いない。中国観を大きく転換させた吉野は、二十一カ条支持という態度から大きく変わり、第三革命の勝利を確信するようになった。彼は、その後も一貫して在日中国留学生の対日抵抗運動に同情を惜しまず、五四運動の時に留学生たちを積極的に支援したのである。

### 3. 留学生と中国の近代化

では、清末中国の留学生は近代中国のなかでどのように位置づけることができるのか。

本章の視点からすると、留学生は何よりもまず、「近代」という新しい文化の運搬者と実践者であった。言い換えれば、それは啓蒙知識人としての役割だった。近代中国の近代西洋に関する新しい知識、そして近代的意識の形成は、留学生たちによる力が非常に大きかった。啓蒙の力の強さは直接に辛亥革命のなかに現れている。辛亥革命の発端であった武昌蜂起は明確な指導者がいなかったなかで勃発し、しかもたちまち全国各地に影響を与えた。それは革命の機がすでに熟していたことを意味しているにほかならない。革命の成功はそれまでの留学生たちを主力とした啓蒙、革命活動なしには考えられないことである。その意味では、辛亥革命は留学生の革命でもあったといえよう。

さらに、留学生が帰国した後も、法政、教育、軍事など各分野で中国の近代化過程で主力として活躍した。言うまでもなく、各分野で大きな力を発揮したこれらの日本留学経験

者は、「親日」にしろ、または「反日」にしろ、様々な意味で自分たちのなかに「日本」を刻印されていた。彼らにとって、また近代中国にとっても、日本はまさに自分のなかでの重要な「他者」であった。

おわりに

近代の空前の規模に達した日中の留学交流は我々に何を残したのか。このことについて、中国人留学生との交流をきっかけに、中国観を大きく転換した吉野作造の言葉はヒントになるのではないか。吉野は『対支問題』（一九三〇年）のなかで、日本の対中外交について次のように語っている。彼はまず、「或は同文同種といひ或は唇齒輔車といふ、口頭禪は幾万遍も繰り返されるが、目前の利害と感情とが斯う著しく喰ひ違つてゐては親まうにも親みやうがない」<sup>19</sup>と指摘する。そして、日本が中国対してとるべき行動について次のように戒めた。

日本が支那に対して為せる過去の行動を慎密に反省すること。斯うした反省は、如何の点で彼等に徳とされ又如何の点で彼等の怨を買ひしかを明にするのみならず、同時に又我々をして如何の点を彼等に学ぶべきやを識らしめ、以て新に彼我相親の境地を発見するに資するだらう。(中略) 同一行動も彼等からは我々同胞間に於けるとは全く別個の意味に取られないとは限らぬ。斯う云ふ点に付ての思ひ遣りは我々に於て実は格別に鈍いと思ふ。殊に支那関係の日本人の最初の出発点が国家的または政治的であつただけ此点の斟酌は最も大事である。此方面の不用意のため我々が幾ら無用の疑惑を彼等から蒙らされたか分からない<sup>20</sup>。

吉野と同時代の日本に、吉野と同じく日中の「相親」を唱えた者は決して少なくなかった。しかし、国力の差が歴然とした中で、そのような「相親」の思いが多くの場合、独善的なものだったと言わざるを得ない。そのような独善性は日中間のズレを絶えず再生産させていた。それに対して、真なる「相親」を望んだ吉野は、もっぱら政治的に打算するのを戒め、あくまでも対等な視線で両国関係を捉え、日本人に反省を促したのである。上記の吉野作造の言葉は現在においても、日本だけでなく、広く東アジアのすべて国々や人々の間でも通用するものではないか。

---

1 ジョセフ・S・ナイ（山岡洋一訳）『ソフト・パワー——21世紀国際政治を制する見えざる力』、日本経済新聞社、2004年、26頁以降を参照されたい。

2 ジョセフ・S・ナイ前掲書、34頁。

3 平野健一郎『国際文化論』、東京大学出版会、2000年、11頁。

4 平野健一郎前掲書、2000年、66頁。

- 
- 5 張之洞著『勸学篇』、中州古籍出版社、1998年、116頁。
  - 6 同上。
  - 7 張之洞前掲書、117頁。
  - 8 康有為撰、姜義華等編校『康有為全集・第四集』、中国人民大学出版社、2007年、105頁。
  - 9 外交史料館所蔵「在本邦清国留学生関係雜纂 陸軍学生ノ部一」(明治31年—明治36年)。ただし、原文のカタカナをすべてひらがなに変換して、適宜句読点をつけた、以下同。
  - 10 (青年叢書第一卷)『武備教育』、民友社、1895年、16頁。
  - 11 尾崎行雄「対支那処分案」、清崙太郎、小松悦二編『楞堂集』、読売新聞社、1909年、1413頁。
  - 12 法政大学史料委員会編『法政大学資料集・第11集(法政大学清国留学生法政速成科特集)』、1988年、148頁。
  - 13 蔣方震「軍国民之教育」『新民叢報』22号、台湾藝文印書館、1966年、47頁。
  - 14 青柳篤恒「支那留学生教育と列国」『外交時報』122号、明治41(1908)年1月。
  - 15 青柳篤恒「支那の子弟は何故に我邦に遊学せざる可からざる乎」『早稲田学報』141号、明治39年11月1日。
  - 16 吉野作造「日支交渉論」『吉野作造選集8』、岩波書店、1996年、152頁。
  - 17 吉野前掲書、150頁。
  - 18 吉野作造「第三革命後の支那」『吉野作造選集7』、岩波書店、1995年、168頁。
  - 19 吉野作造「対支問題」『吉野作造選集7』前掲、288頁。
  - 20 吉野作造「対支問題」前掲、393頁。